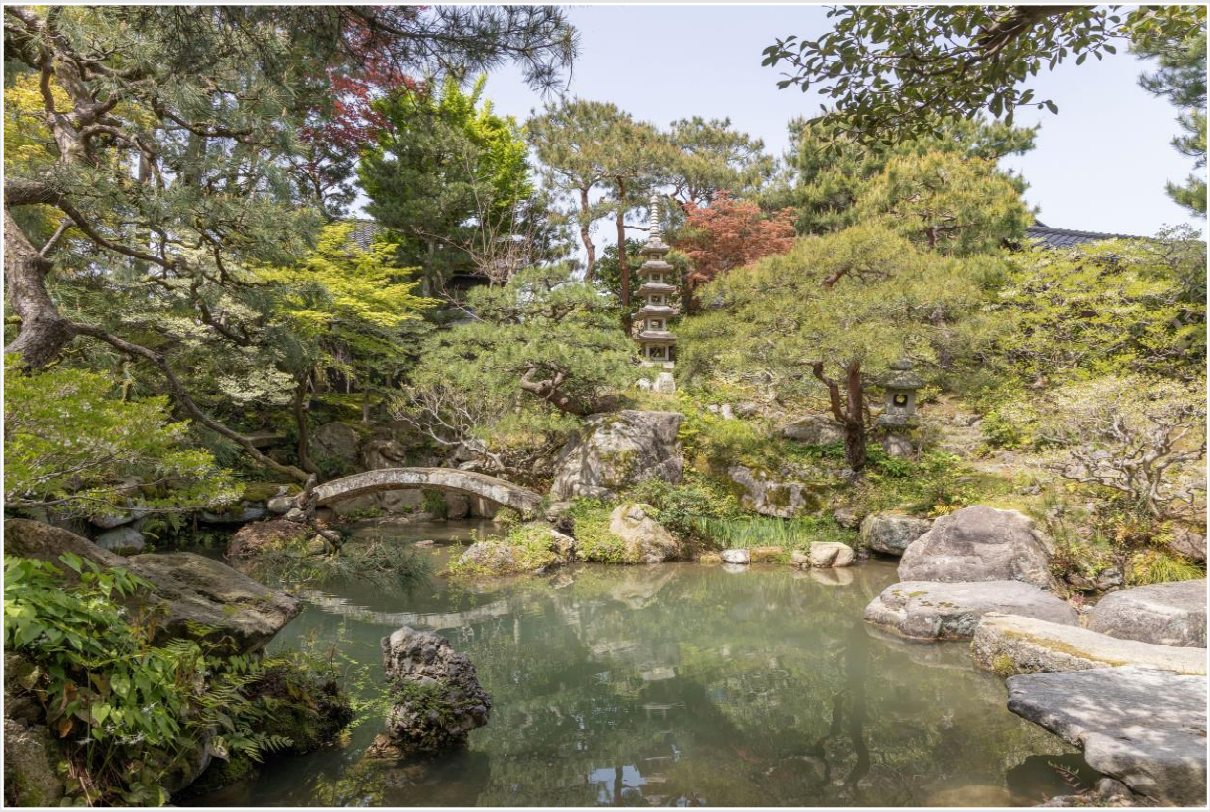
西氏庭園見学会

現地説明資料



令和６年 10 月 12 日

金沢市文化財保護課

― 概　　説 ―

１ 名　称　　西氏庭園

２ 種　別　　名勝

３ 所在地　　金沢市長町３丁目地内

４ 面　積　　１，１４３．６１㎡

５ 所有者　　個人

６ 概　要

　西氏庭園は金沢市の中心市街地で、城下町の武家地であった長町の大野庄用水沿いに所在する。大正５年（１９１６）頃に土地を取得し、住宅と庭園を整備して以来、代々継承されている。

　庭園は主庭、前庭、背戸で構成され、主庭は中央に池泉、敷地北西隅に高く土盛りした築山を配し、園路を巡らせることで、立体的な設えを、住宅の主屋と離れから観賞するとともに、回遊も楽しむことができる。

　池泉は巨石等により修景され、大野庄用水を水源として導水・排水されている。庭石と石造物には北陸、近畿、東海、瀬戸内など国内各地の石材が使用されている。植栽はマツ等の高木、ツバキ等の中木、ナンテン等の縁起木、山野草と多くの植物で構成され、ドウダンツツジとモミジが特に彩を添える。

　このように西氏庭園は、城下町の武家地の伝統的な宅地の在り方を踏襲しつつ、新たな趣向と工夫を凝らして作庭された優れた近代の庭園で、その芸術上及び学術上の価値は高い。

西氏庭園について

（1）沿革

西氏庭園は、東西に延びる長町五番丁通りと南北に延びる大野庄用水沿いの通りが交差する角地に位置する。当地は江戸時代を通じて平士級の武士が住まいした場所であり、江戸時代中期以降は、「武田」姓の武士の名が確認できる。現在の敷地は、藩政期から続いた敷地割に北側隣地の一部を加えたもので、大正５年（1916）頃、現所有者の祖父で、羽咋郡北大海村（現・宝達志水町）の地主であった西孝太郎氏が土地を購入し、住宅と庭園を整備した。西孝太郎氏は昭和６年（1931）に亡くなるが、「ともかく庭に山水の作れるところ」という晩年の願いを叶えるにふさわしい場所としてこの地を求めたとされる。作庭は、植宗園の六代目である植村宗太郎氏の手による。

（2）空間特性と現況

【地形・地割】

敷地は 1,100 平方メートル余りの広さがあり、ゆとりある敷地を持つ邸宅が多い長町地区の中でも、比較的大きい規模を有している。

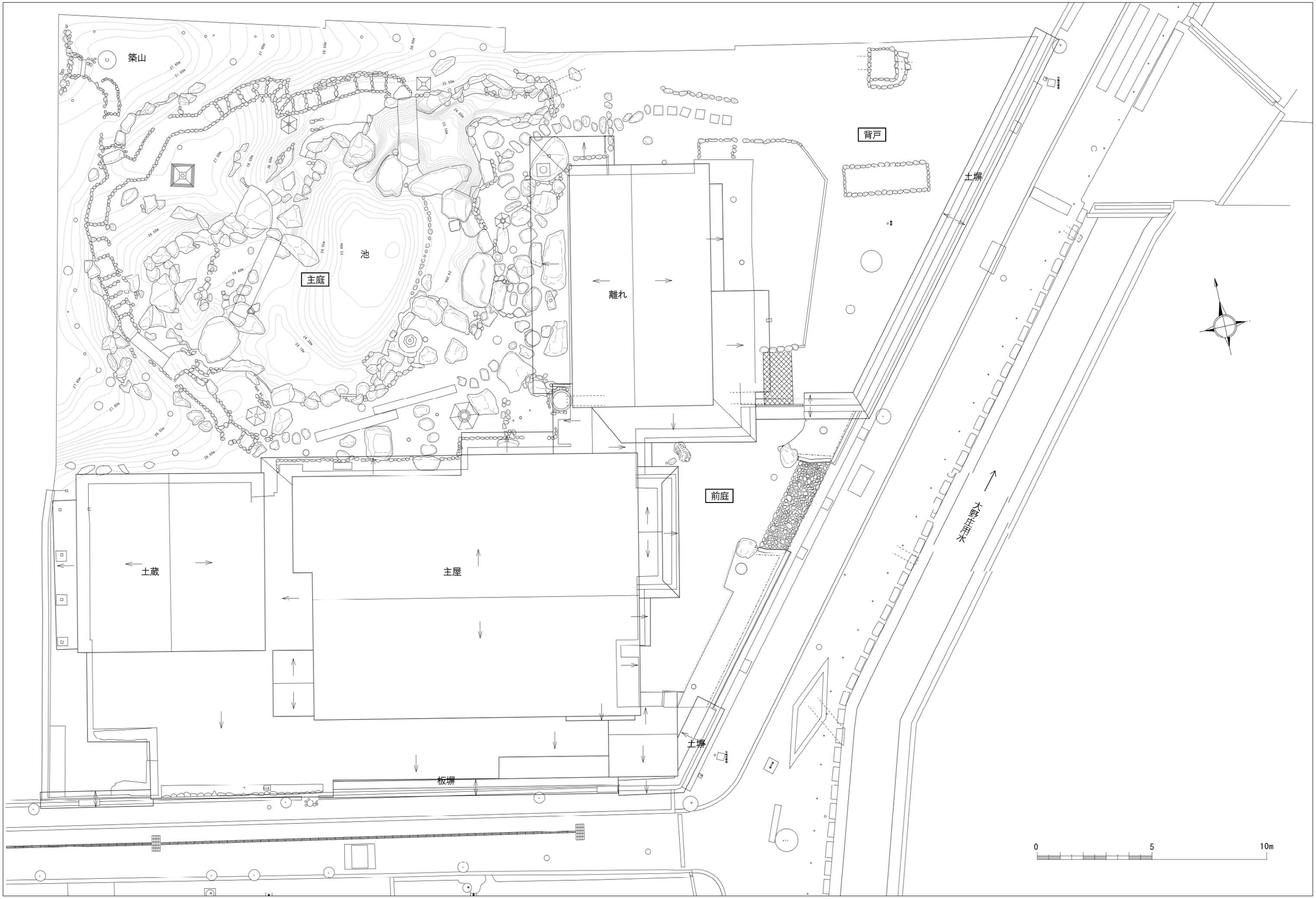
建物の配置は敷地の東側を正面とし、大野庄用水沿いの通りから後退した位置に主屋が東面して建ち、主屋の西側に土蔵、主屋の北側に離れを配する。表構えには門は設けず、敷地入口両側は石積の上に生垣を設けている。左右の生垣には土塀が続き、左の土塀は内部が中空の木造小舞下地の土塗壁で、敷地角で折れて南側と合わせて約 6.1 メートルとし、右の土塀は版築によるもので、離れ横の木戸から矩手に折れて街路に沿って設けられ、合わせて約 21.3 メートルと長大である。南側の五番丁通り沿いには、正面側の土塀に続き、腰壁竪板張りの板塀を約 12.6 メートル延ばし、途中で主屋下屋の張り出し部分に取り付き、再び下屋西側に板塀を約 5.1 メートル延ばし裏門を設ける。

庭園は、前庭、背戸、主庭によって構成されている。

前庭は砂利敷きで、式台玄関と勝手口までの道程となっている。用水沿いの通りに面した入り口には粒の揃った小石を寄せた敷石を配している。現在はアカマツが４本みられるが、かつては式台玄関手前に幹分かれのマツがもう１本植わっていたほか、勝手口脇には白梅があったことがわかっており、生垣のオカメザサとともに「松竹梅」の庭を企図していたものとみられる。式台玄関の脇には獅子を象った景石が置かれている。

前庭の北側、離れに近い位置に空間を仕切る塀の木戸があり、これを開けると背戸が続いている。菜園的な空間であり、小石で囲った花壇のほか、多種の山野草が随所に植えられている。外周の土塀からやや後退した位置に樹高 20 メートルを超えるモミの大木があり、壮大な樹冠を呈している。離れ前には、空間を囲うようにして杉皮塀が設置されている。

離れに沿って背戸を西にまわると飛石の起点がある。これを伝いさらに進むと視界が大きく開け、一面に主庭が広がる。主庭は敷地の北西部一帯を占め、東側と南側の二方が建物に面しており、主屋居室と離れ座敷をそれぞれ視点場に、縁を介して眺める構成になっている。庭の中央に池を穿ち、その背景となる北西側は高く土盛りのうえ築山としており、池の対岸部の巨石が切り立った断崖の景をみせている。離れ前の池汀には、護岸から張り出すようにして長尺の拝石が据えられ、庭先からの眺望点となっている。建物側に大小の飛石が打たれ、南側の築山の麓まで続いている。登り始めからは小石で縁取った園路が設けられ、これに沿って築山を登降することで庭全体を一巡することができる。道程には池があるが、水面に渡りとなる長形の石を２つ設け、間を大石で象った島でつなぐことで、回遊性を確保している。



［第１図］西氏庭園 実測平面図

【石組・景石】

主庭には、縁先の沓脱石やそれに続く飛石、踏分石などに、各地の多種多様な庭石が用いられている。沓脱石では、客人を迎える離れ側に大振りで色彩豊かな鴨川石、鞍馬石を置いている。主屋側は伊予青石、敦賀石のほか、地元の赤戸室石を配している。飛石にも表情豊かな庭石が多くみられ、伊予青石の大石や白川石の伽藍石は踏分石として、北木石は短冊切石敷として用いている。池畔の拝石は大形の三州石の平石で、その先の池中には石灰岩を一石立てている。沢渡石は長尺の三州石と敦賀石で構成しており、つなぎの島にも敦賀石を用いる。築山では富士の黒朴石がまとまって組まれており、園路や階段の縁には犀川で採れる小烏石を敷き並べている。途中、切り立った位置には架け橋を表したともみられる摂津御影石を敷き、この近くにある反橋までは大振りの敦賀石がつないでいる。

景石は主屋の前に特徴的な形姿のものがみられ、若狭石の巨石のほか、六角灯籠のそばには苔むした独特の風合いをもつ石が置かれている。ほかに飛石や築山園路に沿って若狭石や能登の滝石が要所にある。

護岸の石は敦賀石を主に用いている。池底はコンクリート仕上げであり、一部の石がこの基面上に積まれていることが特徴である。池の背後の築山土留は、護岸石から連続する巨石を主体に構成されており、眺めの焦点ともなる豪快な石組がみられる。

［第２図］西氏庭園 離れの沓脱石（鴨川石）

［第３図］西氏庭園 離れの沓脱石（鞍馬石）

［第４図］西氏庭園 踏分石（白川石）

［第５図］西氏庭園 短冊切石敷（北木石）

［第６図］西氏庭園 拝石（三州石）

［第７図］西氏庭園 池中の立石（石灰岩）

［第 8 図］西氏庭園 沢渡りと島（三州石、敦賀石）

［第 9 図］西氏庭園 築山の石組（富士石）

［第 10 図］西氏庭園 築山の園路、階段（小烏石）

［第 11 図］西氏庭園 主屋前の景石（若狭石）

［第 12 図］西氏庭園 基面上に積んだ護岸石

［第 13 図］西氏庭園 巨石を組む築山土留

【石造物】

灯籠、層塔、橋、手水鉢などが多彩にみられる。灯籠は築山の要所に配され、火袋に鹿と雲が彫られた小豆島石の春日灯籠や、いずれも白川石製の丸形創作灯籠、織部灯籠、火袋の樋口が猪目の善導寺型灯籠などが添景を成している。また、主屋の手前にある三州石の六角灯籠は高さ３メートル以上の大振りなもので、火袋に松竹梅、中台に十二支、竿に雲竜、竿の下部から基礎にかけて荒波がそれぞれ彫られている。築山の頂付近には庭の高低差を一層強調するように五重層塔が据えられている。出島に架かる反橋は長さ約 3.5 メートルを測る長尺の赤戸室石でできており、薄く加工した繊細な仕上げとなっている。離れの土庇の下に組まれた蹲踞には摂津御影石の飾り手水鉢が置かれており、四面に能を舞う人物が陽刻されている。

全体の傾向として自然石、加工品ともに大振りのものが多数入っており、またその一つ一つが表情豊かで、石材に対する施主の強いこだわりがみてとれる。庭石を敷地に運ぶ際、大野庄用水に架かっていた木橋が崩れたとの逸話も伝わっており、当時の作庭が容易ではなかったことをうかがわせる。

［第 14 図］西氏庭園 春日灯籠
（小豆島石）

［第 15 図］西氏庭園 丸形創作灯籠
（白川石）

［第 16 図］西氏庭園 織部灯籠
（白川石）

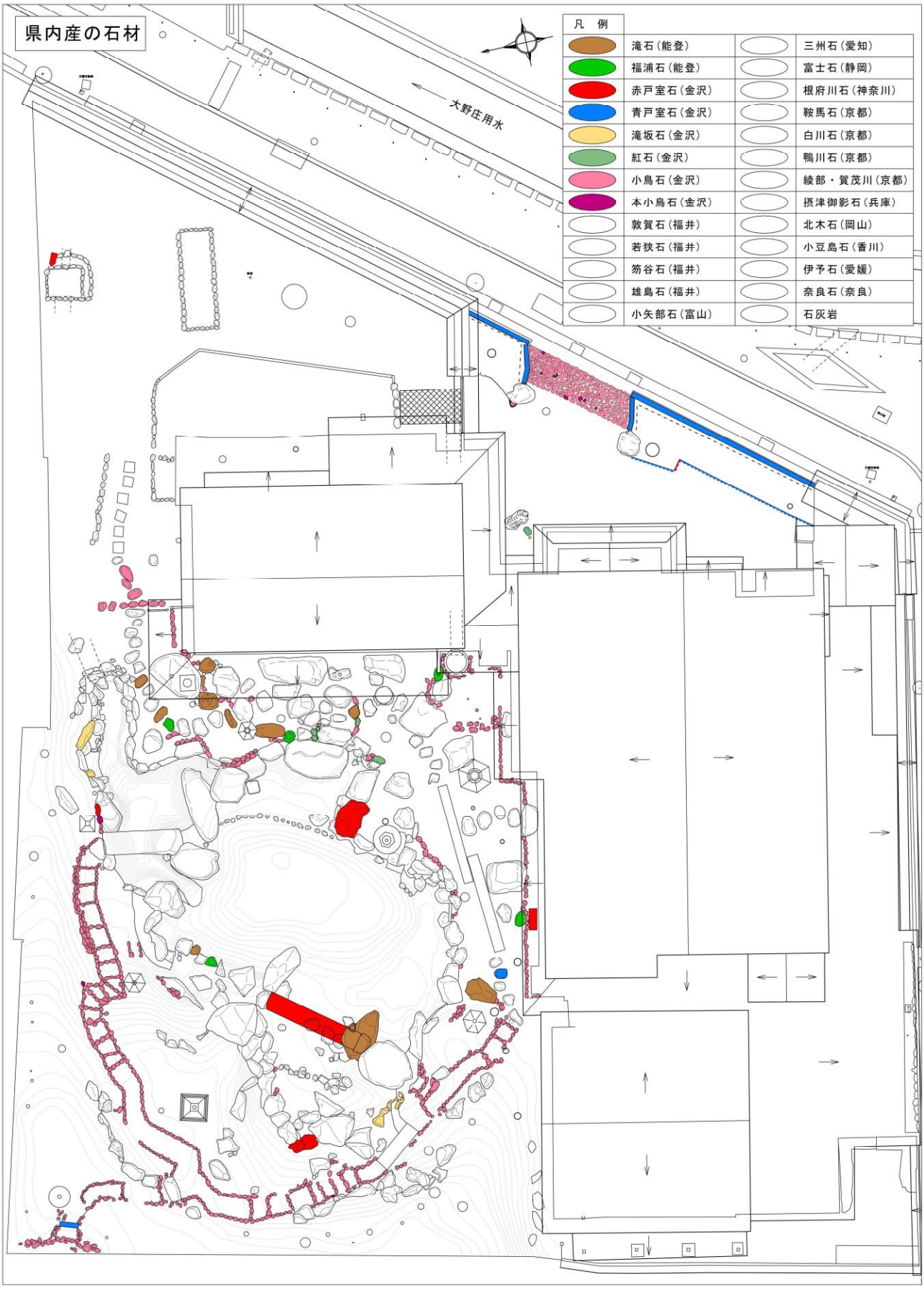
［第 17 図］西氏庭園 善導寺型灯籠
（白川石）

［第 18 図］西氏庭園 六角灯籠
（三州石）

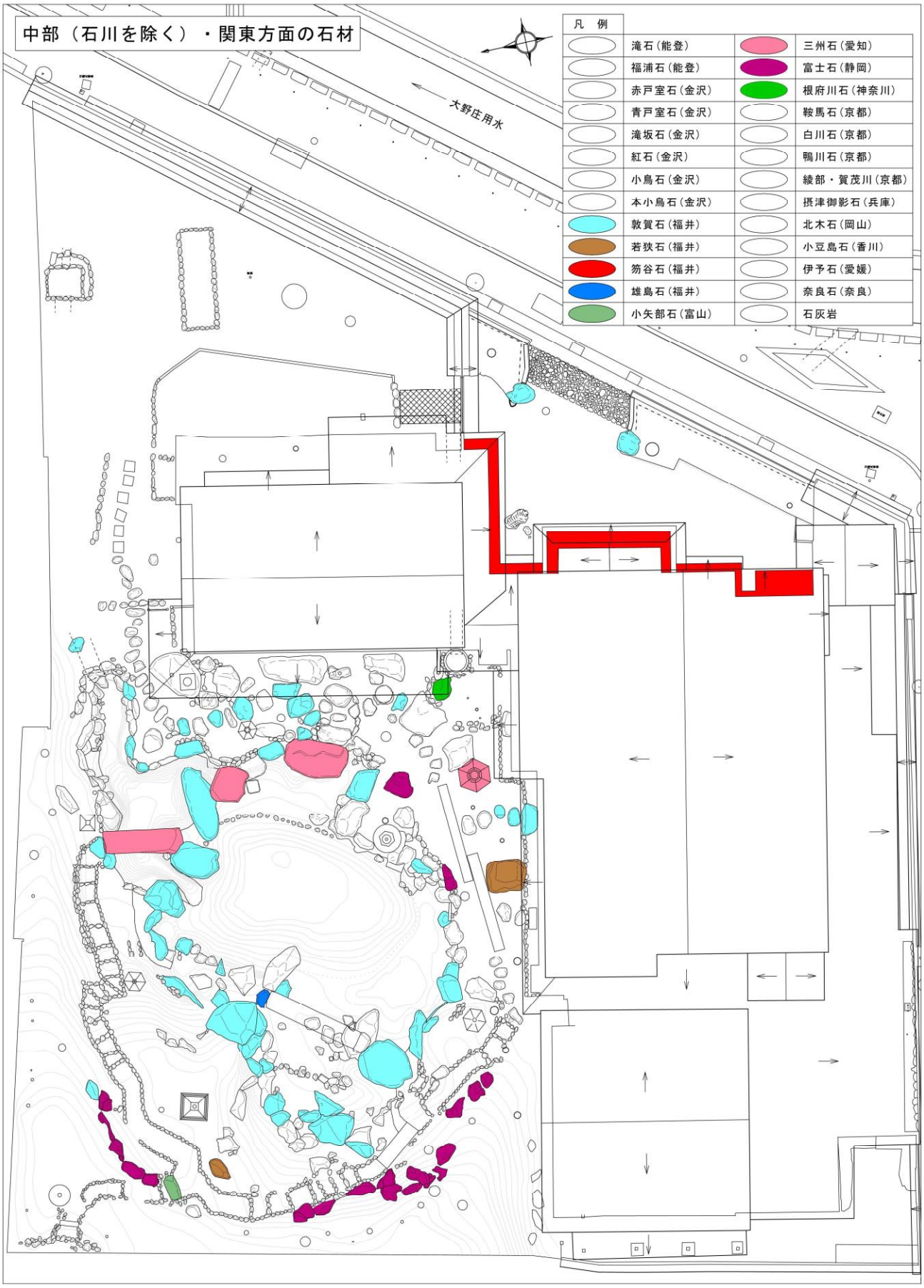
［第 19 図］西氏庭園 五重層塔
（花崗岩）

［第 20 図］西氏庭園 反橋（赤戸室石）

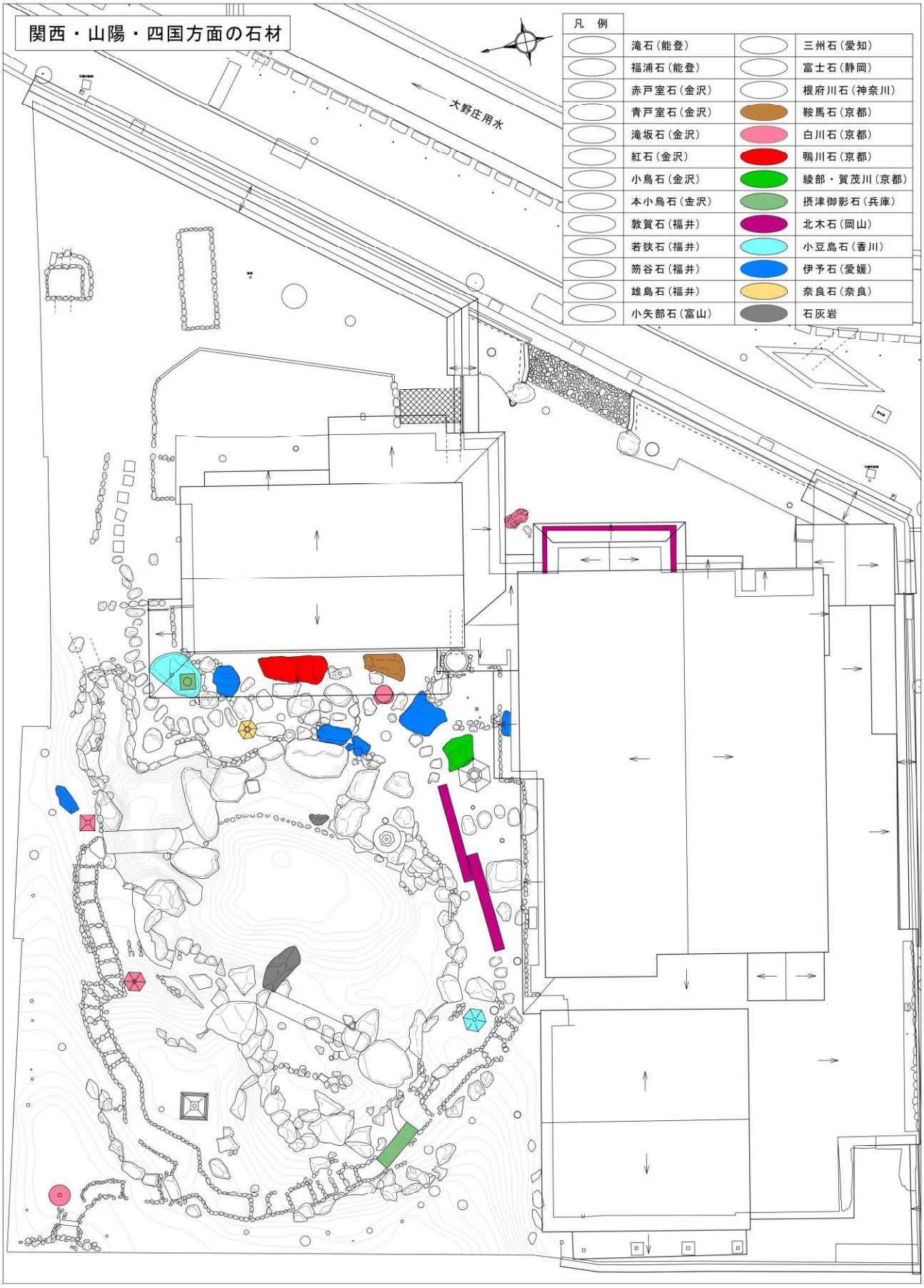
［第 21 図］西氏庭園 手水鉢（摂津御影石）



［第 22 図］ 西氏庭園 石材配置（県内産の石材）



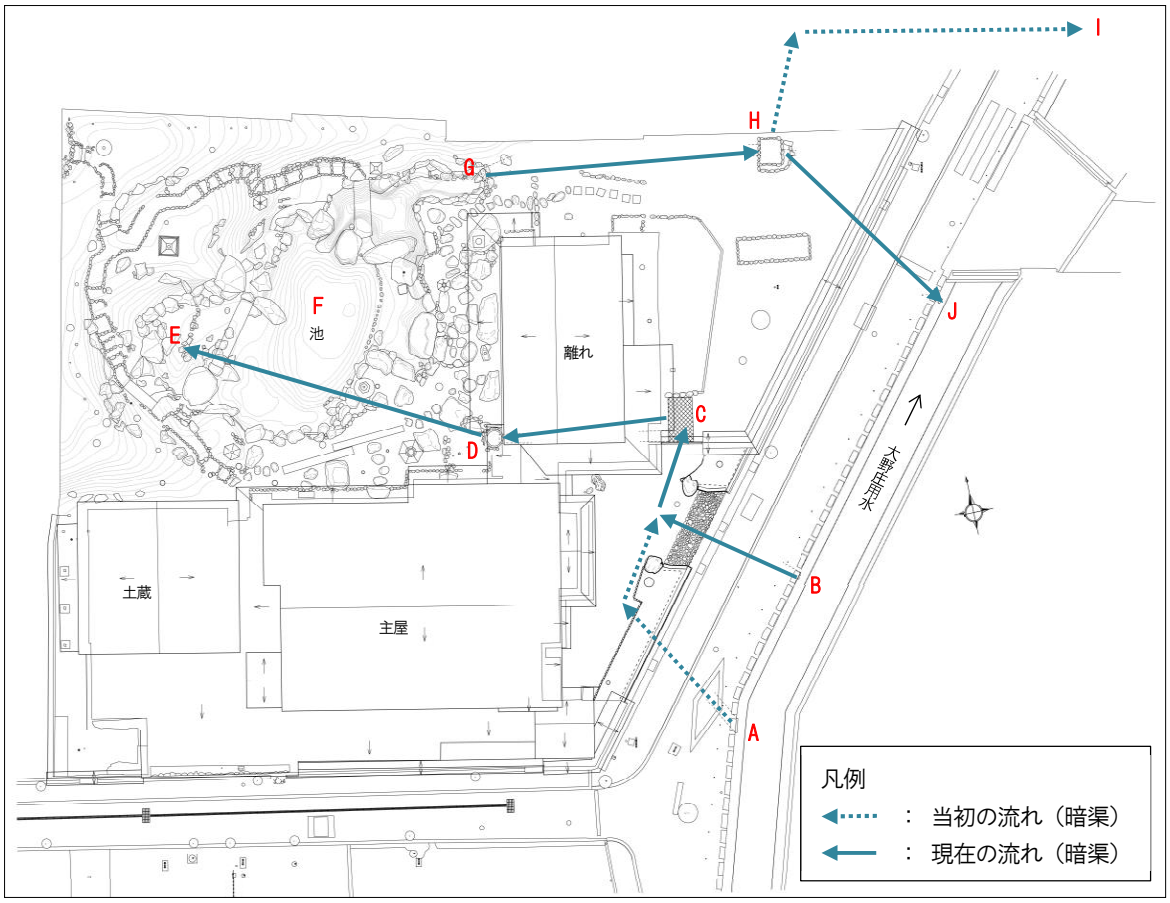
［第 23 図］ 西氏庭園 石材配置（中部（石川を除く）・関東方面の石材）



［第 24 図］ 西氏庭園 石材配置（関西・山陽・四国方面の石材）

【水系】

主庭の池は大野庄用水を水源としており、暗渠管をつないで導水している。第 25 図に導水経路を示す。当初は旧取水口【A】が機能していたが、管内の水の流れが悪くなったため、現在は約 8.5 メートル下流に取水口が変更されている【B】。道路下を横断した後は玄関先を経由して背戸の溜桝【C】に至る。ここで西に流路を変え、離れ下を通過して主庭の溜桝【D】までつないだ後、池の西隅までさらに管を延ばし、反橋の奥にある流入口【E】で水が湧き出す。池を満たした後【F】は、北東隅にある流出口【G】を経て、背戸北隅の溜桝【H】につなぐ。かつては北側隣家の池庭に管が続き、そこから排水されていた【I】。現在は西家から直接用水に水が戻されている【J】。



［第 25 図］西氏庭園 導水経路

［第 26 図］西氏庭園
【A】旧取水口（左）【B】現在の取水口（右）

［第 27 図］西氏庭園 【C】背戸の溜桝

［第 28 図］西氏庭園 【D】主庭の溜桝

［第 29 図］西氏庭園 【E】流入口

［第 30 図］西氏庭園 【F】池（左：渇水時　右：湛水時）

［第 31 図］西氏庭園 【G】流出口

［第 32 図］西氏庭園 【H】背戸の溜桝

［第 33 図］西氏庭園 【I】旧排水口

［第 34 図］西氏庭園 【J】現在の排水口

【植栽】

金沢には自然植生であるタブノキやモチノキなどの常緑広葉樹を主体とした庭がよくみられるが、本庭園では落葉樹の割合が比較的高くなっている。なかでも印象的なのはドウダンツツジであり、池の護岸近くや築山の園路沿い、北側の隣地境界付近に多数みられ、葉張りを大きく広げている。秋に黄葉するものもあり、池の汀や築山斜面に点在するイロハモミジなどの紅葉とともに、庭に彩りをもたらしている。

マツ類ではアカマツが主体となっており、特に背景となる築山の外周部に多く用いている。金沢にはあまりみられない配植であるが、あるいは郷里である能登のアカマツ林を表現しているとも考えられる。築山の前方には曲幹樹形をした主景木のクロマツがある。築山斜面に合わせるように幹が傾いており、寄せて据えた巨石とともに眺めの焦点となっている。なお、築山には五重層塔の横にもアカマツがあったが、徐々に樹勢が衰え枯死したため、平成になって伐採されている。建物側では、池の近くに形姿の優れたアカマツ、クロマツがみられる。このほか針葉樹では、土蔵の近くに背景を構成するヒノキが植わっている。これらにネズミモチ、モッコク、ツバキなど中木の葉が重なり、深い緑を作っている。

池辺には季節の移ろいを感じさせるボケ、トサミズキ、キンシバイ、カンツバキなどの灌木があり、主屋近くや築山の園路沿いにはナンテン、マンリョウなどの縁起木もみられる。山野草が多いのも特徴で、春以降、スミレ、シャガ、イカリソウ、ユキノシタ、ハンゲショウなどが楽しめる。高木から地被に至るまで多種多様な植物を用いており、庭石と同様、施主のこだわりが随所に感じられる構成となっている。

［第 35 図］西氏庭園 主景木のクロマツ

［第 36 図］西氏庭園 紅葉期の木々